

雪国から環境と教育と未来と

神村ふじを

山形は雪国である。だが、今年の山形に雪はまったくない。1月末時点で左沢あてぞわは積雪量0cm。寒中にも関わらずこんなな雪がない年はまず経験したことがない。

お隣の寒河江市で、1/31〜2/2の3日間、「やまがた雪フェスティバル」が開かれたが、この陽気ではせっかくの雪まつりも盛り上がり欠けたようだ。

会場になった山形自動車道寒河江SAのすぐ近くにある最上川ふるさと総合公園に雪はまったくなくて、話によると月山の麓にある西川町の仁田山というところからようやく雪を掻き集めて開催に漕ぎつけたとのことだった。

雪下ろしをしなくていい分、楽なことは楽なのだが、早くも今夏の農作物の出来を心配する農家の人もいて、雪不足は、県内各地の農業や観光にも影響を与えているようである。このような状況に、地球温暖化、異常気象がまったく影響していないと言い切れるはずがない。

トランプ米大統領は、化石燃料重視の政策を追求し、地球温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」を離脱している。また、米航空宇宙局(NASA)における地球温暖化ガス調査活動予算を削減しているとも聞く。

2018年に米政府の関係省庁がまとめた報告書には、「温室効果ガスの排出増加が歴史的なペースで継続していることを受け、今世紀末までに米経済の年間損失額は数千億ドルに達する見通しである」と書かれているそうである。

気候変動が米経済と米国民の健康に深刻な損害を与えていると警告しているにもかかわらず、トランプ大統領は、報告書の内容を「信じない」と公言し、中国や日本、アジアの国々など、諸外国が温室効果ガスの排出量を削減する必要があると、まるで人ごとのような態度を見せている。

昨年9月、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんが国連で演説した。その「How dare you」に象徴される彼女のスピーチ内容は強烈だった。

「all you can talk about is money and fairy tales of eternal economic growth. How dare you!」
「あなた方大人の話といたら、お金のことと夢物語のような経済成長のことばかり。いったい何を考えているの?」英語に疎い筆者でも、スッと理解できるフレーズである。

彼女は国連のあるニューヨークへ向かう途中、カーボンニュートラルヨットで大西洋を横断したそうだが、ヨットの帆に「Unite Behind the Science」という言葉が掲げられた。「科学の基に団

結する」という彼女の強い信念を表している。

彼女はトランプ大統領に対しても同様のメッセージを発信しており、彼に科学にもっと耳を傾けるよう警告している。そして、事実をきちんと認めて対策を実施してほしいと訴えている。そうならないから、安心して学校に戻れないから、今ここにこうしていると……。

国連で行われた気候行動サミットにおいて、サミットの会場入り直後、ほんの数分だけだったが二人は同じ場所に居合わせた。その際に、彼女のそばを通り過ぎる大統領をグレッタが睨みつける様子が全世界に報道された。

彼女の主張に見向きもせず、木で鼻を括ったような態度に、怒りとも取れる彼女の眼。このグレッタとトランプの出会いのワンシーンは、地球規模の環境問題が直面する課題を一瞬で表したような場面でもあった。

弘法大師は「六大は無碍むげにして常に瑜伽ゆがなり」と説いた。

自然界そのものを表す「地」「水」「火」「風」「空」の五大と人間の精神を表す「識」を合わせて六大とし、無碍とは何も障害が無く自由自在、瑜伽とはヨガの意に通じ、心身の統一を意味する。

仏教の言葉なので分かりにくいところがあるが、要するに、大自然に起こる様々な現象は、人間の精神と連動し、それが相互に融合したり分離したりバランスを取りながら、世界を、世の中を、

社会を形づくっていくことらしい。

人間の識大（意識）に関わる部分が五大を犯しているとすれば、空海上人に言わせれば、人間界の狂気が自然界を犯し、危うい世界をつくっているということになる。

トランプ、習近平、金正恩、プーチンといった世界のトップに立つ指導者たちが、自国の利益を最優先に考え、なりふり構わず他国を追い落としとしていくような、自国第一主義、覇権主義、ポピュリズムといった考え方に縛られていて、私の眼にもトップリーダーたちが単なる「Selfish Giant」のように映ってしまっている。それをグレッタさんの眼はしっかり見抜いているのだ。

アフガニスタンで非業の死を遂げた中村哲医師の「国を守るのは武器ではなくて水と緑だ」という理想の社会の実現に向けて努力している人たちの傍らで、一国の大統領が決断すれば、敵国の司令官をいとも簡単に抹殺できるという現実。六大無碍とははるかにかけ離れたこの社会。こんな社会はお大師様にもチコちゃんにも叱られる。

安倍総理が提唱する持続可能な社会。不確定要素に満ちた未来をどう生き抜いていくのか。その提唱の裏にある教育にかけられた期待の大きさを感ずる半面、誰も経験したことのない未来の姿、子どもたちの姿に大いに不安を感じる世の動きである。

加えて、子どもたちの未来の姿に直接関わる教育分野で大きな国の動きがあった。昨年末に国が打ち出した「GIGAスクール構想」といっものびある。

政府は12月に民間からの支出も含めて26兆円規模の経済対策を閣議決定した。その一つとして盛り込まれたのが、学校のICT（Information and Communication Technology: 情報通信技術）環境の強化をねらった「GIGAスクール構想」である。

簡単に言うと、学校の校内LANを10ギガの高速大容量に整備し、義務教育段階において、令和5年度までに、全学年の児童生徒一人一人がそれぞれ端末（タブレット）を持てるようになるというものだ。

教育現場では、ICT教育の重要性は認識しているものの、学力向上、生徒指導、いじめ、不登校、働き方改革等々課題山積で、教師たちがICTに付いていけない現状がある。ブラック企業とも揶揄される学校。ここに来て、教師、指導者の確保が大きな課題となっている。

しかし、ICT革命はまったなしで進もうとしている。そのように進めていかないと国際社会を生き抜く日本の子どもたちは取り残されてしまうという危機感が透けて見える。

教育に携わる者として、子どもたちの未来に不安を持ってしまおうというのはあまりよろしくない。子どもたちの未来に夢と希望を与えるのが教育の使命だと思っているからだ。

だから、もちろん子どもたちがICT抜きで生きていけるとは思っていない。思っていないが、人間が生きることの根っこにある何か大切なものが置き去りにされていくような気がしてしまうのは、年を取ったせいなのだろうか。

参考… 気候変動に関する報告書「第4次全米気候評価第2巻」（米政府）の発表に伴う報道（BBC NEWS

JAPAN 2018/11/27 付インターネット版ニュースを参照）